

まほうやしき

江戸川乱歩

青空文庫

1

しょうねんたんでいだんのなかで、いちばんからだが大きくて力の強い井上一郎さんに、小学校三年生のルミちゃんという、かわいい妹がありました。そのルミちゃんが、ある夕がた、ちんどん屋のあとについて、町はずれのさびしい森の近くまで行ってしまったのです。

井上くんは、おかあさんにたのまれて、ちょうどそのとき、遊びに来ていた同じだんいのノロちゃん（野呂一平くんのあだ名）とふたりで、方々さがしまわって、やっとルミちゃんを見つけましたが、ルミちゃんは、ちんどん屋のおじさんがおもしろいものを見せるとやるというから、いっしょに行くのだといって、どうしても帰りません。

「きみたちにも見せてあげるから、いっしょにおいで。それはふしぎなおもしろいものだよ」

とんがりぼうしをかぶり、だぶだぶのどうけふくを着て、かおにはまっ白なおしろいをぬったちんどん屋が、やさしくいいました。

そして、三人は、町はずれの森の中の古い赤れんがのせいようかんへつれこまれたのです。みんなが、入口をはいつてドアをしめると、中はまっ暗でした。

「あら、ちんどん屋さん、どこへ行つたの」

ルミちゃんがさげびました。しかし、なんの答もありません。

井上くんは、手さぐりでルミちゃんをさがし、その手をとりました。おくびょうもののノロちゃんは、井上くんのからだにしがみついています。すると、そのとき、むこうの方がぼうつと明るくなつて、ちんどん屋のすがたがあらわれました。大きなまっかな口で、にやにやわらつています。

「さあ、これから、おもしろいものを見せてやるよ、えへへ」

そういつたかと思うと、ちんどん屋のすがたが、水のゆれるようにぼうつとかすんで、まるで、えいがの二じゆう写しのように、べつのものにかわつてきました。そして、そこにあらわれたのは、黒いシャツを着た、せいようあくまのおそろしいすがたでした。

「きやあつ」と、ひめいを上げて、さいしよににげ出したのは、ノロちゃんでした。井上くんもルミちゃんの手を引いて、入口へひきかえました。しかし、入口のドアは、おしでも引いても、あかないのです。いつのまにか、かぎがかかつてしまったのです。

ふりかえると、せいようあくまのからだに、またしてもふしぎなことが起っていました。あくまのからだは、足の方からとけるようにすうつときえていくではありませんか。そして、くびだけがのこつて、ふらふらとくうちゅうにただよっているのです。しかも、そのくびが、口をあけて、けらけらとわらいだしたではありませんか。

三人は、おそろしさに声も出ず、動きもできなくなつてたちすくんでいますと、このときとつぜん、ぱつとでんとうがついて、あたりが、ひるのように明るくなりました。あくまのくびは、もう、どこにも見えないのです。そこには、一まいのガラスの大きなドアがしまつていて、そのむこうは、一目で見えるろうかです。

じつにふしぎです。どうけものとあくまが、けむりのようにきえてしまったのです。しばらくしても、なに事も起りません。三人は、入口をふさがれてしまったのですから、どこかに出口をさがさなければなりません。そこで井上くんは、思い切つて、しょうめんの一まいガラスのドアをおしてみました。すると、音もなくすうつとあくののです。

三人は、そのドアの外のろうかに出ました。見ると、むこうに小さな木のドアがあいたままになっています。

井上くんたちは、そこに近づいて、おずおず中をのぞいてみました。ドアの中に、もう

一つのドアがあつて、それもあいています。そして、そのむこうに、でんとうのついた小さなへやがあるのです。

井上くんは、ルミちゃんとノロちゃんの手を引いて、その小べやにはいつてみました。三人がはいると、二じゆうのドアがぴたりとしまつてしまいました。「あつ」といつて、ドアにとびつきましたが、もうおそかったのです。にわかにはやが、大じしんのうようにゆれ始めました。

そして、じつにおそろしいことが起つたのです。あつというまに、この世がさかさまになつて、ゆかがすうつとてんじように上がり、てんじようが下になつてしまつたのです。三人ははらばいになつて、死にものぐるいに、ゆかいたにしがみつきました。

ああ、おそろしいゆめでも見ているのではないでしょうか。

2

しょうねんたんでいだんの井上くんと、ノロちゃんと、井上くんの妹で、小学校三年のルミちゃんの三人が入れられたへやが、まっさかさまになつたのです。いままでたつてい

たところがてんじようになつてしまつたので、三人は、「わっ」といって、つくえの足にしがみつきました。

ところが、ふしぎなことに、さかさまになつても、つくえもいすも、子どもたちも、てんじようにくつついたまま、すこしもおちないのです。へんだなと思つていると、へやはまた、ぐるぐるまわり始めました。もう目がくらんで、いまにも死にそうです。

そのうちに、へやのゆれるのがだんだんしずつて、やがて、ぴたりととまりました。三人は、きゆうに起き上がる力ありません。そのとき、へやの一方のドアがすうつとあいて、人の声がきこえてきました。

「うふふふ……。おどろいたかね。早く、こつちへ来なさい。でないと、またへやがまわりだすよ」

三人はそれを聞くと、びつくりして起き上がりましたが、足がふらふらして歩けません。なん度どころびながら、ようやくドアの外へ出ました。

そこはまっ暗でした。そのやみの中に、ぽつと、二つの青い玉のようなものが光つています。

三センチほどのまるいものが二つならんで、きらきらかがやいているのです。

「ふふふ……。見えるかね。これは、わしの目玉だよ」

そんな声がきこえたかと思うと、あたりがすうつと明るくなってきました。そのうす明りで見えたものは……。

ああ、そこにいたのは、一ぴきのおそろしいライオンでした。茶色の毛が、大きなかおの上にさかだつて、二つの青い目がきらきらと光っています。

三人は、「わつ」といって、さっきのドアにとびつきましたが、いつのまにかぴったりしまつて開きません。しかたがないので、へやのすみに、うずくまつてしまいました。

「ウオーツ」ライオンが、おそろしい声でうなりました。そして、のっしのっしと、こちらへ近づいてきます。

「ウオーツ」また一声うなつて、ライオンが、ぐわつとまっかな口を開きました。三人は、あたまからくわれてしまうのではないでしょうか。

「わはははは……」

ふしぎ、ふしぎ。そのときライオンが、にんげんの声でわらいだしたのです。

「おまえたち、ここはまほうやしきだよ。だから、どんなふしぎなことでも起るのだ。さあ、見るがいい」

ライオンがぴよんとび上がってくるつとびっくりかえりました。

すると、ライオンのはらがまつ二つにわれて、そこから、さっきのせいようあくまの黒いすがたが、あらわれたではありませんか。にんげんが、ライオンの皮をかぶっていたのです。

「わははは……。どうだね。まだまだきみたちのびっくりするようなことが起るのだよ」それから、せいようあくまは三人を二かいの一室にとじこめてしまいました。大きなベツドが一つおいてあつて、三人にそこでねむれというのです。

そのへやには、鉄ぼうのはまつた小さなまどが一つあるきりで、そこから月の光がさしこんでいました。

ノロちゃん、井上くんのかたに乗つて、まどから外をのぞいてみました。まどのすぐ外に高いへいがあつて、そのむこうは原っぱです。

「あつ、いいことがある。バッジを使えばいいよ」

ノロちゃんとはびおいて、井上くんにささやきました。すると、井上くんもにつこりわらつて、ポケットからしようねんたんでいだんのきしようのB・Dバッジを一つとり出しました。

それから、上着のポケットから手ちょうを出して、紙をまいちぎり、えんぴつでなにか書いて、B・D バッジをその中につんでまるめました。ノロちゃんは、それを受けると、また井上くんのかたにのぼって、まるめた紙玉を、力まかせに、まどの外へほうるのでした。

バッジは、ほうるときの重しになったのです。

あくる朝のことです。ノロちゃんが、ふと目をさまして、ベッドの上を見ますと、そこには井上くんもルミちゃんもいなくなつて、二ひきのライオンの子どもが、ながながとねそべっていました。ノロちゃんは、「ぎやつ」とさけんで、ベッドからとびおりましたが、そのとき、自分のからだを見て、きぜつしそうになりました。自分のからだにも、茶色の毛がいつぱいはえていたからです。

3

井上くんと、ノロちゃんと、井上くんの妹のルミちゃんの三人が、まほうやしきにとじこめられ、ベッドでねむって目をさますと、三人とも、子どものライオンにかわっていま

した。まほうの力で、ライオンにされたのかとびつくりしましたが、じつは、ねている間に、ライオンの毛皮をかぶせられていたのです。

朝になると、あのせいようあくまがはいってきて、毛皮をぬがせてくれましたが、それから三人は、つぎつぎときみのわるい、ふしぎなものを見せられました。

へやを歩いていると、ゆかのおとしあながぱつと開いて、その下に、すべり台のようなものがあり、三人は、するするとちか室のそこへすべっていきました。

そのうす暗いちか室には、いろいろな形のロボットがたっていて、ぎりぎりとは車の音をさせながら、三人をとりかこむのでした。

そのつぎは、四方のかべも、てんじようも、ゆかも、ぜんぶかがみをはりつめたへやへ入れられました。

三人のすがたが、かがみからかがみへとはんしやしあつて、なん百、なん千とかさなつて見えるのです。

井上くんも、ノロちゃんも、ルミちゃんも、あんなへんな気持になったことはありません。なん百、なん千という自分が、上・下・四方からうじゃうじゃとかたまつて、自分をにらみつけているのです。

そのほか、まだいくつもふしぎなおそろしいものを見せられましたが、そのあとで、せいやあくまにつれられて二かいのろうかを歩いていきますと、とつぜん、どこからか、みようなわらい声がきこえてきました。せいやあくまは、びっくりしたようにたちどまって、しばらく考えていました……。

あるへやへそつと近づいて、そのドアをぱつと開きました。するとそこに、思いもよらぬひとりのしょうねんがたっていたのです。

「あつ、きさま。しょうねんたんでいだんちようの小林だなっ」

せいやあくまが、ぎよつとしたようにさけびました。

「そのとおり、ぼくは小林だよ。」

井上くとノロちゃんが、てちようの紙に手紙を書いて、B・Dバッジを重しにしてまどから投げたのを、きんじよの子どもがひろって、ぼくにとどけてくれたんだ。それでぼくは、さつきから、このまほうやしきにしのびこんでいたんだよ。さすがのまほうはかせも、ゆだんをしたものだね」

「えっ、まほうはかせだって」

「そうさ。きみは、そんなせいやあくまにばけているけれども、ちゃんとわかっている。」

『おうごんのとら』のじけんで、ぼくたちしようねんたんていだんに負けた、あのまほうはかせだ。こんどは、あのときのしかえしをしようとしたんだろう。だが、ぼくが来たら、もうだめだよ。ちよつと、そのまどから下をのぞいてごらん」

そういわれて、せいようあくまのまほうはかせは、思わずまどの外をのぞいたかと思うと、あつとやってたちすくんでしまいました。二十人近くのしようねんたんていだんいんたちが、まほうやしきのへいの外をぐるつとりまいていたからです。

「きみが、井上くんたちをかえさなければ、あの中のひとり^{あけち}が、すぐ明智先生とけいさつへ知らせるのだよ」

「負けた。わしの負けだよ。きみのいうとおり、ちよつとしかえしをしてやろうと思ったのだが、きみにかかつてはかなわない。B・Dバッジのつうしんとは、気がつかなかった。こんどもかぶとをぬいだよ」

まほうはかせは、ざんねんそうににがわらいをするのでした。

そのあとで井上くんやノロちゃんの話聞いて、小林しようねんは、まほうやしきのひみつをみごとときあかしました。

「この家の入口をはいったとき、ちんどん屋のすがたがぼうつときえていって、せいよう

あくまがあらわれ、それがくびばかりになったのは、一まいガラスのドアをかがみに使ったきじゆつだよ。

ちんどん屋は、きみのぶかだったね。まず、ちんどん屋が、ガラスドアのむこうにたつてすがたを見せておいて、そのでんとうをけすと、まっ暗になって、ちんどん屋は見えなくなる。そのとき、てんじようにしかけたはこの中に、せいようあくまのきみがたつていて、そのはこのでんとうをつけると、ガラスドアの、ちようど、ちんどん屋のいたあたりへ、すがたがうつるのだよ。

それから、くびばかりになったのは、でんとうを動かして、かおだけにあてるようにすれば、むねから下は暗くなつて、ガラスにうつらなくなるのさ。

もう一つの、へやがぐるぐるまわったのは、ゆうえんちなどにあるびっくりかんのしかけで、三人のたっているゆかは、ゆらゆら動くだけで、ひっくりかえりはしないのだ。

まわりのかべや、てんじようが、はこのようにできていて、それがくるくるまわるので、自分たちが、てんじように上がったようにかんじるのさ」

「うん、えらい。やつぱり小林だんちのちえは、たいしたもんだ。では、わしが負けたしるしに、あの三まいの子どもライオンの毛皮は、きみたちのおもちやにあげることに

しょうね」

こうしてしょうねんたんでいだんは、またしても、おとなのまほうはかせをうち負かしてしまったのです。

青空文庫情報

底本：「文庫の雑誌／ぼくらの推理冒険物語 少年探偵王 本格推理マガジン」 光文社文庫、光文社

2002（平成14）年4月20日初版1刷発行

初出：「たのしい三年生」講談社

1957（昭和32）年1月号～3月号

※誤植を疑った箇所を、「江戸川乱歩の「少年探偵団」大研究 下巻」ポプラ社、2014年3月第1刷の表記にそつて、あらためました。

入力・・sogo

校正・・みぎた

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

まほうやしき

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>